黒竜江

村山雅俊著

日本経済時報社

黒竜江

村山雅俊著

日本経済時報社

黒 竜 江

1974年2月5日 印刷　　¥ 3,500
1974年2月10日 発行

© 著 者 村 山 雅 俊

発行者 木 村 哲 行

印刷者 三 浦 企 画 印 刷

発行所 福岡市西区長尾 5—10—21
TEL (092) 861—7286 日本経済時報社

（装幀 伊東徳治）

序にかえて

この一篇の書物を異郷シベリヤの地で悲憤の涙とともにこの世を去った多くの同胞の霊前に捧げる。それは、戦中、戦後を通じて不思議にも命を存えた一個の人間として天与の使命を果したいがためである。

この一篇の書物を世界の真の平和のために認める。それは、異なった社会体制に無批判的に憧れ、平和な世の中を乱し、延いては世界の平和をも脅かそうとする一部の青年男女に、如何なる社会と雖も人間によってつくられた社会というものが、所詮は欠陥と不満にみちた社会であることを知ってもらいたいからである。

この一篇の書物を迷える多くの人々のために贈る。それは、理想の人間社会というものは、決して社会体制を変革することによって齎されるものではなく、その社会を構成する一人一人の人間の心が美しくならなければならない、ということを認識してもらいたいからである。

この一篇の書物を我が祖国の異常な繁栄の中に、安逸を貪りつつある若き青年男女のために綴る。それは、三〇年前、繁栄する今日の日本の礎となった、多くの青年たちが、この日本の国にいたということを彼等に知ってもらいたいからである。

この一篇の書物を愛する子供たちのために与える。それは、君たちの父親や、その世代の人々が、その青年時代に、苦しい異郷の地において、人間としてどのように生き抜いて来たかを語り聞かせたいからである。

この一篇の書物を敬愛するモンゴルの人々に贈る。それは、戦いの渦中に立たされていた兵士の中にも、モンゴルの人々を心から敬愛し、モンゴル民族の繁栄のために、一命を捧げようとしていた数多くの日本人が、この世の中に存在していたということを、知ってもらいたいからである。

最後に、この一篇の書物を私たちの恩師であり蒙古人たちから、弥勒菩薩（メートル・バクシー）の名で慕われていた麻生達男先生の御霊前に捧げ、心から哀悼の意を表するものである。

昭和四九年二月一日

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序にかえて……1
黒竜江（アムール）……3
激戦の跡をさすらう……4
砲煙は消えて　阿城への敗残行　不安な一夜
悲しき暗夜行　玉泉の夜嵐　同胞のむくろを越えて　開拓団の女
野宿生活……29
海林収容所　にわか露店　発疹チフスの流行
草生す屍　牡丹江収容所　日本人ク
ーリー　朝鮮人ブローカー　性別検査
ダモイ？　さらば牡丹江よ　珍談と奇行
空腹のシベリヤ……59
ハバロフスク駅　マロース
暗夜輸送　室温零下八度　俎上の人々　一切れの黒パン

レソループ　体位検査　悲しい母心
病人数にもノルマ　体位三級となる
シベリヤ仕込みのポーバル……89
身を殺して仁をなす　ソ連式清掃法　障りな
き話　腹の空くパン切リ　食足らざれば
生きるためには　馬鈴薯泥棒　小娘の
説教　熱燗恋いし　思いがけない受賞
ノルマと人間　コゲ准尉と鼠准尉　タニミソ
竜の絵とロシア娘
懲罰……130
営倉第一号　やはり人間でよかった　天幕バ
ラックの留置所　二〇四懲罰収容所　死生の
境を歩む　為て遣られたり　信じられぬ話
再び炊事勤務
奥地を経てコムソモリスクへ……161
二三七収容所　マンホール水のスープ　医は
仁術　日増しに燃え上る民主運動　平塚運動
河船のかんかん虫　最終帰国船の出発

シベリヤ最後の炊事勤務
氷結の黒竜江畔……182
将官収容所　獄舎の客　二人の露人水兵
監房生活の一日　欲望と幸福感　裁判
再び二一分所へ
様々な人間像……208
高まる勉学熱　ガーリヤ事件　日本人も人間だ
所長とポーチカ　ソ連社会の縮図
逃げたいならば一度死ね　集団逃亡事件
共産主義社会は心でつくる　母の死　ラッキョウ
信じられなかった帰国……246
帰国準備　ナホトカへ　斉藤老人の決意
帰国船での回想……259
モンゴルを偲びて　塾舎よさらば　出郷
大連　壮行会　葛根廟　王爺廟

蒙古を熱愛した青年たち……283
西北学塾大学　火難　正月の追憶
現地人の正月　塾生活　禁酒禁煙　告白
高粱飯の禅問答　大興安嶺の旅　廟
祭　大園遊会　退学理由書
内蒙古の追憶……318
美しい内蒙古の初印象　ダーチン寺の第一日
仏様にも三匹の虱　蒙古式洗面法　蒙古
貴族の娘たち　蒙古人が語る人間の偉さ　毛
皮の中の子供　楽しみは祖国の便り　ダーチ
ン寺の祭　草原の旅　草原の獣たち
蒙古人小学校　白堊のアユルハイ寺
草原に中村大尉を偲ぶ　トムルスフとの別れ
さらばダーチン寺よ　白木の落馬
五たび死を免れて……405
入隊　横井庄一の中隊　人生の大博打
激戦の沖縄へ　第一二師団通信隊
主計業務　五度目の命拾い

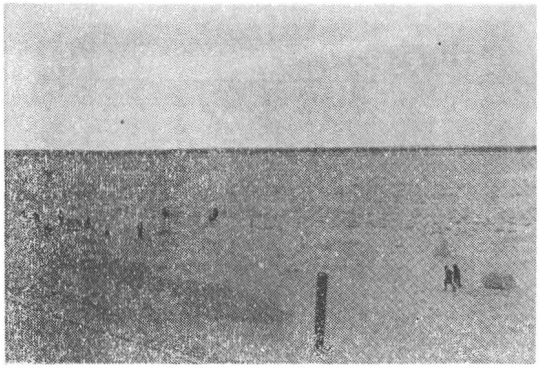
黑ア
竜ム
江ル

黒竜江（アムール）は蒙古高原の東部に源流を発し、シベリヤ東南部を東流して間宮海峡に注ぐ、全長四、四八〇粁の大河である。

この一篇の書物の中の主人公である谷は、実在の人物であって、この物語りは、黒竜江（アムール）と、その周辺地帯を舞台にしたもので、事実に基づいて書かれたものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黒竜江（アムール）



結氷したアムール（氷上を人が歩いている）

黒竜の岸辺は寒しまたひとり
わがはらからは逝きて帰らず

「生きねばならぬ！生命の有る限り。生きねばならぬ！敗戦日本の歴史の一頁を後世に伝えんがためにも……。」吐く息も凍る酷寒零下四〇度の大シベリヤ平原の、とある収容所の中で、不気味に闇を劈く黒竜江の流氷の音を聞きながら谷は考えていた。

「それにしても八年間もの長い年月、よくも、このような苦しい生活に堪えて来たものであった。こうして粗末なバラック造りの野菜貯蔵庫のような建物の中で、二段式の木造の寝台の、干草の入った薄い敷布団（マットラス）の上に、毛布一枚で横たわっている自分自身の存在が不思議なくらいである」。

谷は、不図、そんなことを考えていた。

蒙古、満州、朝鮮を経て再び満州に戻り、やがて終戦となったが、その間

に谷の姿は、学生服から軍服に変り、谷の関係した最初の部隊はグアム島で師団長以下玉砕、次の部隊は沖縄で、第三番目の部隊は鮮満国境の琿春で、何れも師団長以下玉砕している。そして最後の部隊では、谷自身が自ら求めて赴かんとした蒙古の地へ、谷の学友が赴き、そのまま行方不明となり、終戦後一〇余年に戦死が確認されている。若し谷の希望が、この時、容れられていたならば、既に谷はこの世の人ではなかったわけである。更に谷にとって最後の運命の危機は、終戦の年の八月一三日、突如として谷の生命を脅かしたのであったが谷が死地に赴くべく、命を帯びたその日、奇しくも列車の到着が遅れたため、五たび谷は生命を全うしたわけである。

その頃には谷の頭の中に「自分は絶対に死なない」という一つの信念が生れていた。この信念が戦中よりも更に苦難に満ちていた、戦後八年の間、常に谷の運命を光明へと導いていったわけである。

「信念は死をも克服する！」

谷の信念は、谷がこの言葉を口遊むたびに益々固いものになっていった。

それにしても長い年月であった。昭和二〇年八月二五日のハルピン郊外における武装解除の日より、谷に対する試煉の日は長々と続いて来たのである……。

激戦の跡をさすらう

砲煙は消えて

捧げなば蒙古の民にと思いしを
さだめやかなし囚われの身は

「すべてが終った……。然し、これが新たなる人生への再出発であるかも知れない……。否、二三才のふみにじられた青春を末期とする自分の人生の終焉であるかも知れない……」

谷はソ連軍兵士の前で軍刀を投げ捨てたとき不図そう思った。

昭和一八年二月、谷は蒙古語の教師となるため、東京にある谷の母校から蒙古に派遣されたのであったが、蒙古の原住民と共に生活しているうちに谷の心は次第に変っていった。

「よし！自分は蒙古民族のために生涯を捧げてやろう！蒙古におけるシュヴァイツァーになってやろう！」

青年谷は、そう思うようになったのであった。事実、谷は蒙古のラマ寺において蒙古人たちに心から慕われていた。

「このような立派な日本人は未だかつて、この寺には来たことがなかったし、将来とも来ることはあるまい。」

これは、蒙古人たちの谷に対する人物評であった。谷が蒙古人たちから、このように慕われたのは、谷の恩師メートル先生（バクシー）の日頃の薫陶の然らしむところであり、谷自身、常にバクシーに感謝していた。メートルとは、実は梵語のメイトレヤの訛りであり、即ち弥勒菩薩という意味であって、谷の恩師麻生教授に、蒙古の活仏（ゲゲン）から贈られた名前である。この一事でも麻生教授が如何に立派な人間であったかが伺えるわけであるが「勝てば官軍」の言葉の示す通り、蒙古人の尊崇の的であった筈のこのメートル・バクシーが、恰もナチス・ドイツのヴッヒェンワルト強制収容所の女所長イルゼ・コッホの如く、蒙古人の皮を剝いでこれを鞣めし、自分の部屋に飾っていたというデマが外蒙古やソ連に伝えられ、麻生教授は指名手配を受ける結果となったのであるから、戦争とは実に恐ろしいものである。

尤も、後日ソ連軍に捕えられた麻生教授が「お前は本当のメートルか?」と尋ねられた時「そうだ」と答えても「お前のような立派な男が、メートルの筈はない」といって、どうしても信用されず、ついに釈放されたということである。

これと同様、青年谷の決意した、蒙古のシュヴァイツァー、つまり蒙古の菩薩となる夢も、こと志と反して、谷は学徒兵として動員され、やがて日本の敗戦により菩薩も悪魔として処遇される結果となったわけである。

阿城への敗残行

狂奔の馬を駆りにし思い出の
道もかなしや今日のさだめは

「ダバイ、ダバイ!」

谷の眼前にソ連兵の銃剣がキラリと光った。少しでも列が乱れると忽ち「ダバイ」という声が聞えてくる。もともと「ダバイ」というロシア語の意味は「与えよ」という意味であるが、ここでは「さあ並んで行け、並んで行け」という意味に使われていたわけである。この言葉は便利な言葉でソ連兵が何か欲しい時も「ダバイ」であり、仕事を強要する時も「ダバイ」であった。

谷たち一行は黙々として歩いていた。大陸の八月二五日といえば、そろそろ九月も近づき気候も凌ぎやすくなってよいはずなのに、囚われの身には、いやに暑く感ぜられた。谷が眼に流れ込んできた額の汗を拭きながら、

ふと後を振り向くと、先程までその下で武装解除を受けていたハルピン郊外の忠霊塔の姿が、次第次第に小さくなって行き、再びその姿を見ることができないと思うと、谷には敗戦の悲哀さが一入深く感ぜられた。

つい半月ほど前、ハルピン郊外の、ある朝鮮人の経営する農場から谷のいた部隊本部で一頭の馬を軍馬として買上げることになった時、本部には谷を除いて誰も軍馬受領に行く者が無かった。蒙古では馬は蒙古人の下駄といわれていた程なので、蒙古生活の経験のある谷は、馬に乗れる懐かしさのあまり自ら進んでその仕事を引受けてしまった。

ところが、この馬は、かつて馬部隊に軍馬として飼育されていた馬で、狂奔癖があり、二人の軍人を落馬させて殺した経歴を持っていた札付の悪馬だったわけである。

そんな馬とは知らない谷が馬受領の手続を済ませ、馬の背にまたがるや否や、馬は谷が農場の人と挨拶をするいとまも与えず、全速力で忠霊塔の方向を目差して狂奔し出した。不意をくらった谷は、手綱が伸び、危うく馬の後方に転落しそうになった。道路はアスファルトの舗装道路なので、若し、この時、谷が落馬していたら完全に後頭部を打ち、脳震盪を起して意識を失い鐙に足を引掛けたままアスファルトの道路を引ずられ第三人目の犠牲者になっていたに相違ない。然し、そのくらいのことで落馬する谷ではなかった。何しろ谷は一度も落馬することなく乗馬できるようになった程であるから、意外と運動神経が発達していた。もっとも、谷は柔道も、その体に似合わず一八才の時には既に講道館の二段を取った程であるから、案外、こんな時に柔道が役に立ったのかも知れない。

とにかく谷は急いで手綱を引絞ったが馬もさるもの、これくらいのことで止まる馬ではなかったのみか、益々その速度を増して疾風のごとく走り出した。谷は初めてこの馬が狂奔癖の馬であることに気付いた。こんな馬は

止めようと思えば、却って逆効果であり、むしろ倒れるまで走らすに限ると思った谷は、逆にムチを当てて全速力で走らせた。道は舗装してあるので馬はたまったものではない。一粁も走った頃には、口から泡を吹き出し、次第に速度が落ちてきたが、谷は懲らしめのために益々強くムチを打った。

折から満州国軍の一個中隊ほどの部隊がハルピン方面からやって来たが、出合頭にその部隊を指揮していた日本人の隊長が谷に向って叫んだ。

「おい！緩鉄しているぞ」谷はハッと思い馬から飛び下りた。緩鉄とは馬の蹄鉄が緩んでいるという意味である。確かに緩鉄していた。それのみか四肢の蹄冠部（蹄の上部で馬の足頸にあたる部分）は完全に割れ、血は蹄を赤く染め、馬は全くの廃馬になっていた。

「大変なことになった。馬は活兵器である。平時だったら処罰は免れない」

谷の脳裡を不図そんな想念がかすめたが、まかり間違えば谷の方がこの馬に殺されていたわけである。

結果的には「御苦労であった。この馬は狂奔癖の馬で、既に軍人を二人殺している馬だったのだ」ということで処罰どころか、却ってその労を犒われて事は済んだ。

谷は歩きながら一瞬以上のような思い出にふけったが、現実の谷は、一頭の馬を廃馬にした道路を廃兵にされて歩かされているわけであった。何処へ連れて行かれるか判らない。また、どれだけ歩かされるか判らない。おそらく、若し谷が馬であるならば蹄冠部が割れるまで歩かされるのかも知れない。日は既に西の空に暮れかかっていた。谷の咽はカラカラに渇き、谷は時々路傍に見える泥水でもよいから、渇いた咽を潤したいくらいの衝動にかられていた。

「吾々は一体、何処へ連れて行かれるのであろうか？吾々の前途には死が待っているのかも知れない？一層あ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com